

第四十五回評論・隨筆賞

評論部門 『月白』に学ぶ―「名詞止めの歌」と余情―（令和4年4月号）

東京 奥 浩昭
おく ひろあき

隨筆部門 『無名碑』から届くもの（令和4年10月号）

奈良 島本敏子
しまもととしこ

奥浩昭の評論について

柏崎驍二の歌に強く惹かれた奥氏は、七冊の歌集を読了した上で、その特徴の一つである「名詞止め」に着目する。そして第三歌集『月白』を選び、その余情効果を考察してゆく。その際、独断によらず来嶋靖生著『短歌の技法』を参考に、三つの型に分類して細かく分析を試みる。また時枝誠記著『日本文法口語編』から〈零記号の感動〉という考え方に言及、柏崎の歌の象徴性と余情を丁寧に解説する。

最後に宮柁二著『短歌実作入門』を熟読し、〈余情〉に深い意味を見いだしていくところが本論の要である。柁二の言う余情とは「表現上に直接現れない」、「作者の生活、思想、哲学、そういうものに近い」ことをまず指摘して、柏崎の余情の核心に迫る。柏崎の思想、哲学は産土吉浜での生活、教育者の父、師宮柁二から得たもの、岩手各地での体験などが熟成したものであり、その名詞止め技法による余情には、北国に生きる人々への力強いメッセージがあると結論づけてい

る。

こうした理路整然とした考察の方法は、まことに明解で説得力にみちている。すでに文学者としていくつかの論文を発表しておられるとはいえ、入会三年目にして、柏崎驍二の歌と技法を虚心坦懐に学ぼうとする姿勢はすばらしく、読み応えのある好論文であった。

「『無名碑』から届くもの」について

島本さんのある読書体験をつづった隨筆である。その本は、表題にある『無名碑』。曾野綾子の小説である。この小説では、ある人物の過酷で理不尽な運命が描かれる。そのあまりの理不尽さに島本さんはその本を書棚の奥深くしまいが、旧約聖書の「ヨブ記」から着想を得ていることを知る。「ヨブ記」もまた、神とサタンによって理不尽極まりない運命を課せられ信仰を試される者の物語である。敬虔なヨブは精神的、肉体的にどれだけ苦しめられたら神を恨むのかを試される。しかし、幸は神から与えられるものであるから、不幸もまた神から与

えられるものであると信じるヨブの信仰は揺るがない。

そのヨブ記を基としてを知り、島本さんは再び『無名碑』を手取る。どんな運命も罰ではなく、また懲らしめでもないことを確認する。島本さんがこの本に出会ったのは、難病の幼いわが子を看病するために昼夜を病院で過ごすという生活に疲弊していたときである。そんな島本さんの人生観を変え、「眼前の重い扉が力強く開かれ

た」と思わせたのである。これは尊い読書体験であり、小説や文献を引用しつつ自身の心の変化をていねいにつづる。

『無名碑』はいつか本棚の中心に置かれる。ご息が五十五歳になられたことと本への感謝を記して文は結ばれる。自身に起きる出来事を受け止め生きる。読書について深い示唆を与える随筆である。

感想



奥浩昭

偶然お目にかかった本郷枝枝氏の歌集『京都西陣 うたを紡ぐ』と、氏の第一歌集の一首に知った歌人柏崎駿二の歌群。それらに通底する宮柊二の言う余情をもった歌を、いつか私も詠めたらと思います。

略歴

一九五四年 鹿児島県生まれ
二〇一九年 コスモス短歌会入会

略歴

一九四二年 和歌山県生まれ
二〇〇五年 コスモス短歌会入会
以来作歌に励む日々



島本敏子

この度は大変立派な賞を頂きありがとうございます。あまりに思いがけなく夢かと思ひ、美しい押し花電報を何度も確かめました。コスモスに入会して十八年。たくさんの方々にお世話になり、感謝の念でいっぱいです。

《選考過程》

選者団に推薦を求め、高野・影山・桑原・狩野・小島・木畑・大松・田宮・津金・小山・福土・藤野・風間・田中・橘・水上比・鈴木・原賀・水上美・大野・松尾の各氏から回答があった。

推薦の内訳（一人1点）は、評論部門が奥浩昭『月白』に学ぶ―「名詞止めの歌」と

余情」9点、中村恵「小島ゆかりの境界線が滲むとき」6点、手嶋千尋「『モーツァルトの電話帳』を読む」1点、白川ユウコ「中澤系とその時代」1点、達知和子「柊二と尾鷲―『獨石馬』『尾鷲』紀行」1点、薄葉茂「歌人のスポーツ感性」1点であった。

随筆部門は、島本敏子『無名碑』から届くもの」9点、工藤玲音「目覚めのキッス」

6点、朝比奈美子「杜沢先生の左手」1点、藤井徳子「母と三度豆」1点、北条忠政「何故百歳まで生きたいか」1点であった。これを二月十八日、編集部で検討した結果、評論部門は奥浩昭、随筆部門は島本敏子の受賞が決まった。